

令和元年5月28日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02130

研究課題名（和文）近世地方仏の調査研究

研究課題名（英文）A Study on the Buddhist sculptures of Edo Period

研究代表者

須藤 弘敏（Sudo, Hirotochi）

弘前大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：70124592

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,800,000円

研究成果の概要（和文）：美術史の研究対象としてこれまで注目されることのなかった近世の地方仏について、その実態と特徴を詳しく調査した。全国各地に多数の作例があるものの、その価値について過小評価されている現状を明らかにし、また地方ごとの相違と共通性をともに把握するに至った。その結果、民俗学や民藝愛好家のみに関心を持たれてきたこの分野について、日本彫刻史の展開の中に位置づけることを得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで美術史はもちろん地域の郷土史や宗教史においても無視されていて、わずかに民俗学や民藝の愛好家から個別に関心を持たれてきた近世の地方仏の実態を把握し、その臓器的な価値を初めて明らかにした。これによって近世の全国各地に展開した仏師以外による宗教彫刻の評価を進め、さらには日本における信仰と造形の本質的な性格も確かめることを得た。

研究成果の概要（英文）：I researched lots of Buddhist and Shinto statues of the Edo period which stay in the various regionz of Japan widely. As a result, I made clear that they had the significance that was important to local culture and Japanese overall culture both sides.

研究分野：美術史

キーワード：民間仏 地方仏 円空

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近世の地方仏像のものについての調査研究はほとんど行われず美術史研究からの関心は薄かった。そのため、実態や特色については未知だったと言える。

2. 研究の目的

近世に地方で製作された仏像(神像を含む)について、全体と個別双方の観点から、その特徴と意義を実地調査に基づいて把握すること。

3. 研究の方法

近世の仏像全体の動向を資史料と各地の報告書を参照しながら、担当者自身の既調査資料を活用して明らかにする。北東北を中心に全国数力所の地域で詳しい調査を行い、作品そのものの性格や地域的な傾向の有無などを明確にする。あわせて民族造形という視点からアフリカオセアニアなどの彫刻に反映している宗教性を分析し、地方仏の率直な表現との比較研究を行う。

4. 研究成果

(1) 近世における中央製仏像の流布

17世紀に全国諸藩が寺檀制度を整える過程で、中世から存在した寺院あるいは仏堂の多くが改廃や城下への移転を強いられ、所属教団の明確化も求められた結果、地域の宗教拠点だった寺々がその性格を変え、長くまつてきた仏像の価値を軽んじるに至った例が少なくない。教団の教義にはずれた尊像や須弥壇荘厳にふさわしくない像の多くが失われたり、歴史的な意義を忘失された像も少なくなかった。津軽地方の場合、領内各村から弘前城下に移転された寺院の伝承と現存する仏像の制作年代や形状が一致しないことを確かめた。一方で、寺院本堂須弥壇上には上方や江戸の仏師工房が製作した、形状や図像が正確で堂内荘厳にふさわしい端正な仏像が相次いで安置されてきた。青森県内だけを見ても、弘前や八戸のような城下町だけではなく、下北半島の小さな漁村の数々に上方の立派な仏像がまつられていることで、中央製の仏像がいかに広く深く流布したか知られる。他の各地においても上方や江戸から高額の対価で購入したことを記す銘文が幾体も確認できた。地方寺院が最上部機関である江戸や京都の本山の権威を尊重するように、仏像も江戸や京都大坂から下ったものこそ重要だという幕藩体制期ならではの価値観が広く浸透していたわけである。またその結果として、整った図像と洗練された金色装飾こそ仏像の必要条件だという認識が全国ほぼすべての地方において共有されていた。圧倒的な数の上質な仏像が行き渡ることによって、列島における仏像の認識が深まるとともに、均質な素材や表現は地域ごとの特色を失わせたとも言える。

(2) 仏堂本尊と異なる機能の仏像

都市と村落とを問わず、堂塔門扉をそなえた寺院ではなく、単独の庵や祠で、観音堂、地藏堂、十王堂、薬師堂などと呼ばれた、内外ともに粗末な造作の小堂がいまも多く存在する。寺院での宗教儀礼とは異なる地域ごとの講や念仏などを行う日常的な信仰の場である。いかに小さく粗末な堂であっても礼拝対象となる仏像が必要だが、こちらには高価な中央の仏師工房作の仏像をまつことは難しい。そのため、在地もしくは近隣の仏師あるいは各地を遍歴する工人や僧侶に依頼した像をまつことが大半だったようである。彼らの制作であっても如来像や観音菩薩像は比較的中央作に似通った像が多いことを確かめた。しかし、多数の作例があり比較しやすい十王像については東北各地と長野県で詳しく調査したが、木取りや彩色などが簡略なものからかなり習熟したものまで多様だった。中央の本格仏師工房のものとは構造や技法が異なるものの、長野県筑北村には木取りや形姿の表現までそれなりに安定した作風のものもあって、こうした小堂の仏像には地域ごとの差異がある。まつられてきた環境が厳しかったため、いずれも保存状態が悪いわけだが、逆にそれだけ傷んでも長く必要とされてきたことを語っている。本堂本尊像には修復や新調の機会が幾度もあったが、小堂の仏像は腐朽するまで使い続けられてきたとも言えよう。また家々の神棚や仏壇にまつられてきた、尊名を特定できないような仏像神像も今は寺院の片隅に納められているものが散見される。これらも同じような環境で生まれ礼拝されてきたもので、その簡略な表現と粗末な材質、大ざっぱな図像の特徴は須弥壇上の本尊像らの対極にある。それゆえにこそ地方仏の特色が強うかがえる存在として重要なことを確かめた。

(3) 仏像の本質を語る地方民間仏

本研究はなぜそうした民間仏が地方で守られてきたのかという視点で調査してきた。地方史や地域文化財の調査でも見過ごされてきた民間仏は膨大な数が残されている。また、それらすべてが造形的な価値を持つわけでも決していない。しかし、これまでの美術史研究は仏像について、精神性をたたえた彫刻という価値と、歴史的な価値から語ってきた。その基準にそぐわない、厳かでも整ってもない近世の地方民間仏だが、一定の存在感があり簡略で質実な表現に実際の信仰に寄り添う宗教造形として評価すべきものが多々あることを確認した。そこには宗派や教義を離れた率直な祈りが映し出されていた。中央作の本尊像を「ありがたい仏」として儀礼の主役に位置づける一方で、日常的な信仰の対象として民間仏を礼拝してきた人々の宗教感情のありようは、日本の社会が仏像に何を期待していたかを語るものにほかならない。それらは図像の規矩を逸脱したり、プロポーションにこだわらなかつたり、地方での仏像への実際の期待がどういったものだったかを語っている。これらを単に地方民衆の造形という大ざっぱ

な一括りにするのではなく、地方の玩具や木偶らとどういふ相違があり、宗教性がどこにあらわれるのかを一体一体確かめてきた。

(4) 円空・木喰と地方仏

これまでの日本美術史は近世の仏像について無関心だが、17世紀の円空、18世紀の木喰に限っては一般の強い愛着もあって研究や展示が盛んである。しかし、彼らの人気には近代的な彫刻作家や民衆に愛された僧侶像を強く期待しているように思われてならない。彼らが他の非専門仏師と異なる重要な意義を持つのは、広い地域を巡歴してその各地に多数の像を残していったことにこそある。そうした視点で調査を続けてきた結果、彼らの造仏に各地既存の地方仏が何も影響を与えなかったのか、また彼らの像はその後各地の地方仏に影響を与えなかったのかを考えるに至った。この問題についてはまだ検討作例に限られているため結論を得てはいないが、明らかにそうした被影響関係にある仏像を複数箇所を確認した。円空や木喰は近世の宗教文化地方文化においてけっして孤立した存在ではなかったことは確実である。近世には中央仏師工房、地方の非専門仏師、そして巡歴の造仏僧、それらが互いに関わり合って仏像が展開していたことを確かめた。

(5) 地方における仏像の伝統

中央作の仏像が全国の寺院に展開した近世だが、各地とも中世以来の仏像をも守り伝えていた。それらが各藩による寺院整理の結果、寺院本堂とは別個の堂や社殿にまつられ、近世仏教の価値基準とは異なる信仰対象として尊重されてきた。廃棄された像も多い中、維持された像は仏でもカミでもあるゆえに地域に密着していた。これらが近世に模作された例が目される。青森県南部町旧福田薬師堂伝来の三体の薬師如来立像、東京都町田市薬師堂の脇侍菩薩立像などを詳しく検証した。どちらのケースにおいても、近世に模作した時点では、より整った中央作の尊像を参照できた、もしくは参照すべきだったわけである。実際、山ほどある秘仏の御前立ち像はそうした近世の新しい様式で造られるのがほとんどである。にもかかわらず、中世以前の元の像そのままに模作した経緯や価値観が目される。地域に固有の尊像に対する信仰が脈々と生き続けていたことを示すもので、宗教造形の一つのあり方を知ることができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

— Hirotohi SUDO "Collection of small Buddhist sculptures of the Edo period at the Chester Beatty library, Dublin" 2016 3 "Japanese collections in European museums V" Josef Kleiner ed. Bier'sche Verlagsanstalt Bonn pp.59 ~ 63

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：矢島 新

ローマ字氏名：Yajima Arata

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。